

なと、わらひ給ひたりき、

〔先哲叢談<sup>八</sup>〕家祖原瑜

祖之大舅芸菴、爲人廊達奇偉、以良醫振一世、每謂人曰、世稱吾甥公瑤爲大儒、余以爲腐儒、古河老小杉元卿嘗至江戶、聞之曰、渠無阿其族、則可矣、至其譏謗之、則可不見以詰問乎、明日芸菴至、元卿盛氣相詰曰、余聞吾子每以腐儒呼吾師、雙桂先生敢問有說否、曰君未知之乎、夫古之大儒必貧困守陋閭、然公瑤家資頗富、是余所以目以腐儒也、元卿抵掌大笑、蓋以其腐富相近也、

〔近世名家書畫談<sup>下</sup>〕雪山の軼事

長崎には富貴なるもの多し、常に奢侈を極む、或時一人の富家筵を開き、同僚を招くことあり、此時客方より謂て曰、若雪山<sup>三</sup>立<sup>北島</sup>先生を迎ひ席上にて、字を作らしめば、この外の配走なしと云、是は先生元來驕奢の家に至らざるを知りての難題なり、時に亭主頓智を出し、兼て先生常に愛する所の賤者に謀りていはせけるは、今日ある所に、美酒佳肴ありて、終日の興を催す、先生至らんやといふ、先生これに涎を流し、急に從ひ行く、至ればいはゆるふうきの家にして、席上豪具をかざり、水陸並至る、先生一見して、忽其奢靡を惡み、杯をとり轟飲、傍若無人なり、時に主人云、先生の揮毫を煩すと、娼婦相伴して俱にこれを乞ふ、先生云、主客兩名汝を并せ三名なり、三紙をこゝに展べよとて、大筆を墨に蘸し、一紙毎に陰器一莖を寫出し、三名に三紙を投與へ、手を揮て歸る、其後途中にて天漪先生に逢ひければ、先生云、此程は豁達のさた承ると云ければ、雪山先生云、馬鹿ども一莖づ、かつがせたりと云はれたるよし、天漪先生後に廣澤先生に語られたりとなん、〔徒然草<sup>下</sup>〕身死して財のこることは、智者のせざる處也、よからぬ物たくはへをきたるもつたなく、よき物は心をとめけんとはかなし、こちたくおほかる、まして口おし、我こそえめなどいふものども有て、跡にあらそひたるさまあし、後はたれにと心ざす物あらば、いけらんうちにぞゆ